

4. 利水の歴史

①農業用水の秩序の確立と経緯

前回は主として治水的な歴史について色々と調査して来たが、今回は利水についての経緯を調査してみる。近代のように各種産業の著しく発達した文化の基では発電、工業、都市生活用水等その目的は多様化している。しかし、明治以前の農業を中心とした時代では河川の利用目的はほとんどの施策が農業を中心として進められ、土地開発、用水の確保等の事業が行なわれており、舟運等物資の輸送の為の用途についても農業に関連したものであると言えよう。以下高津川下流域での顕著な開発経緯とその対応について調査してみる。

(1) 蟠龍湖の疎水工事（下流左岸の開発）

高津川左岸側にある沖田、浜地区の開発と用水の確保の経緯については益田市史等に詳しく掲げられている。これによるとこの地区は先にも述べたように高津川の洪水による河道の変更、又津和野藩による新河道の開削跡等により農地に転用出来る地形であった。水田もある程度は開発されていたが何分にも用水の便が悪く沖田では支川白上川の市原あたりから用水路により取水、又浜あたりでは蟠龍湖よりの水路にて水田農業を行なっていた。しかし洪水の度に水路は破壊され、一方の蟠龍湖よりの開削水路も砂質地のため疎通が悪く、高津川本川よりの取水にしても高低差があり非常な労力を必要とし転用可能な荒地を開発出来なかったのである。

図—4—1 蟠龍湖のの疎水工事



高津村の庄屋、長嶺嘉佐衛門は地形的に蟠龍湖からの取水が可能と判断し津和野藩に疎水工事を願い出たのである。蟠龍湖は海風に吹寄せられた砂丘により成生されたもので周囲約4km、面積0.015km²、水深6～15mもあり水量豊かでその利用は開作、新田あたりで利用されているに過ぎない。この湖水を隧道によって沖田に導水しようとしたのである。

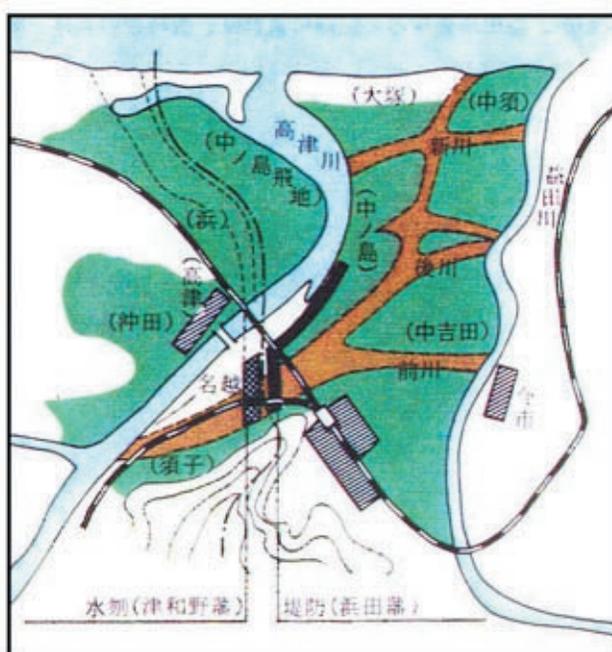
許可を得た彼は堤防の築造から暗渠の開削に至るまで寝食を忘れて没頭し宝永4年(1707)、遂に完成したのである。暗渠の長さは180m余り、巾50～60cm、高さ2.7～3.6m、現在のように機械力と火薬による工事とは異なり、すべて人力で施工したこの工事は正に一大事業であったことが推測出来る。

この疎水工事により沖田の良田と化し、さらには用悪水路を通じ浜地点で再び灌漑用水となり従来より水の便の悪かった浜、下開作地区までもその恩恵を受けたのである。

(2) 旧高津川跡の開発と名越の堤防（高津川右岸の開発）

現在の高津川右岸は元和年間の津和野藩によって行なわれた河川改修のため、前川と称する一種の河跡湖と化していた。又その後の度々の洪水により後川が生まれるなど、吉田、中の島、中須等の地区は縦横に河床跡が出現した。この河床跡は埋立等による開発が進められていたが洪水のごとに流失しせっかくの開発の苦労も水の泡となること再々であった。これは前回にも述べた通り、津和野藩が施工した名越の水刳は平常の流水のみ分水させ、洪水時の増水は旧河道に流れるような構造であったからである。

図—4—2 名越の堤防工事



この地の開発は寛文元年（1661）に始まり、浜田藩はこの地の代表者に継々と開発を許可し続けられていたが、旧高津川はその後も天保7年（1836）、嘉永3年（1850）、安政4年（1857）と洪水の度ごとに荒れ吉田地区の癌とまで言われていた。特に天保年間（1830～）開発が順調に進んでいた河川工事も天保7年（1836）またもや大洪水に見舞われ、せっかくの開発地も砂や石ころに埋まり、川床には松や雑木が茂るほどの荒地となったことが伝えられている。

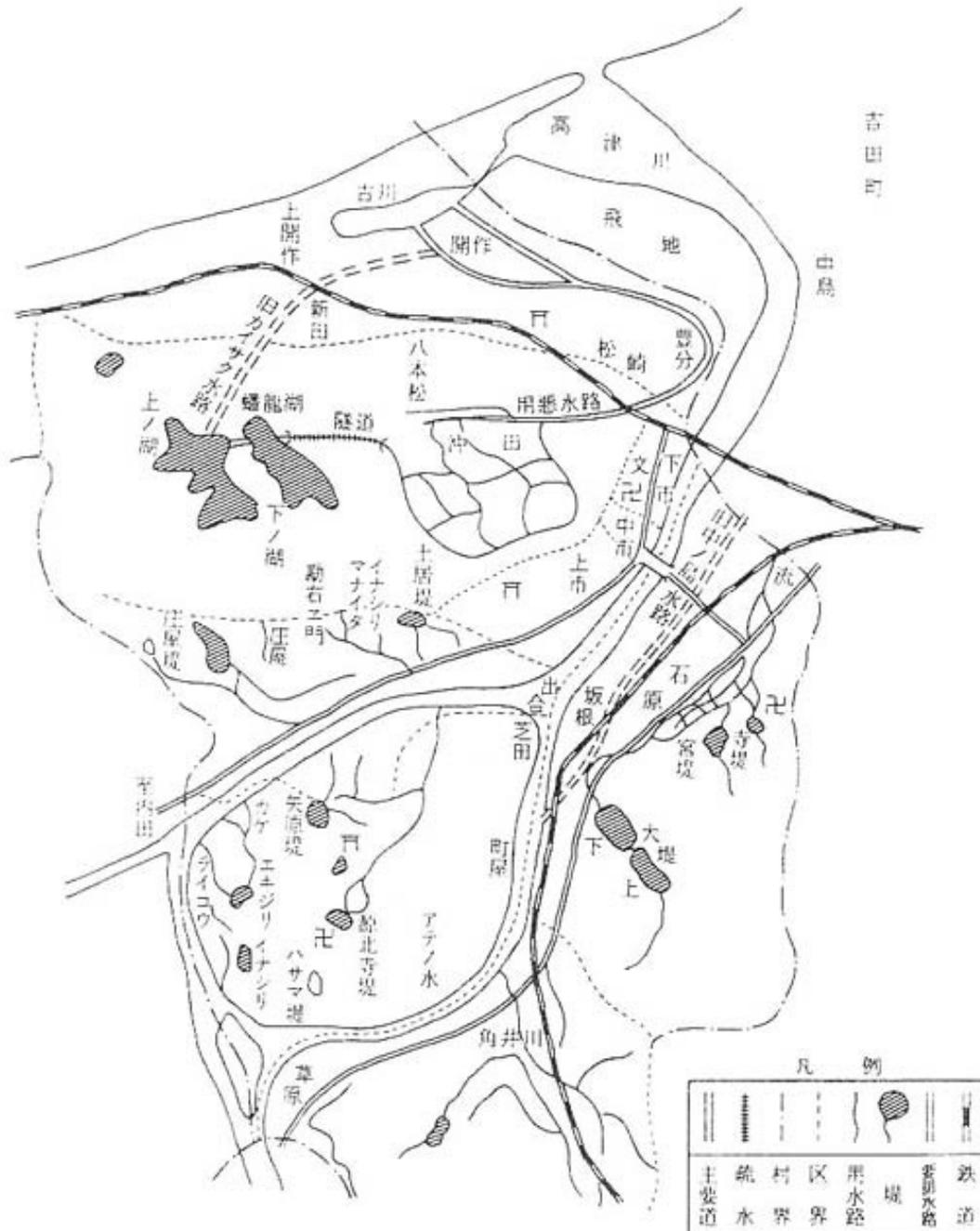
安政6年（1859）益田、乙吉兼帯庄屋、右田三郎右衛門は原因である名越の越流を防がなければいつまでも開発が進まないことを痛感し、名越地区に独力を持って築堤を行なった。又多大な出費と犠牲的な努力を持って荒廃地を開発していった。現在ではこの名越の堤防は跡方もないが、益田市史などの記録によれば、当時世の人は三郎右衛門を今大閼と呼び迎いでいたと言う。

(3) 農業用水の確保

高津川の下流域に溜池が多く存在する。高津川の豊かな水がありながら農業用水は溜池に頼っているのである。図—4—3は昭和初代頃の高津町における溜池の分布と用水路の状況を示す。

(高津町史参照)

図—4—3 高津川水路図（昭和年代始め）



この図で明らかなように、高津、飯田、甘子、須子の各地区は用水源をすべて溜池に頼っている。原因としては高津川河床が農地より低く直接取水出来ない為である。堰の築造があったかどうかは確認出来ないが、今日のように土木技術の進んだ時代ならともかく、仮に築造計画があったとしても、高津川のような大河川の下流では洪水の度に流失してしまい築造は不可能であったろう。

又、高津川は津和野藩時代から舟運が栄えていたことも堰の築造が行なわれなかった一因であろう。このことについては前年度でも調査している。

図一 4—4 は農地の分布状況と主要水源の位置を示している。これにより各地区の特長を表すと次のように分けられる。

●高津、須子、飯田、虫追

水源は溜池のみに頼っている。渇水時には十分な水田は出来ず従って畑地の分布が多い。特に飯田地区は地形的に溜池の築造が難しく農地のほとんどが畑地である。この飯田地区は以前は良田であったことが伝えられている。原因は津和野藩の河川改修でライコウ（現在の派川）が堀割られ、それまで白上川より取水していた導水路が分断された為である。現在では飯田、虫追地区では一部伏流水も使用している。

●中須、中の島、吉田

高津川から取水が出来ないため、益田川より取水している。しかし中吉田地区は充分としても、中の島、中須の一带は十分な用水がなく以前は取水については非常に困難な地区であった。中の島では現在、本川よりポンプアップしているが、河口に近いところも有り塩害の問題がある。従って畑地も多く分布してる。

●角井、金地、向横田の一部

小支川より取水している。角井地区は階段状の水田である。金地は水量が不足し、従って畑地が多い。

●内田、市原、安富、横田、神田、大滝

水源は堰である。白上川の松原堰、匹見川の剣先堰、高津川の卯の木堰である。この堰はいずれも最下流に位置している。水量が充分で従って畑地の分布は少なくほとんどが水田で良質である。特に安富、横田地区は高津川沿川で最も大きな水田地帯である。この用水路築造と農地の開発については益田市史等にその記録がある。大滝と向横田は高津川沿に用水路を設け結んでいるが出水による破損が多く、修復の跡が生々しい。

一般に高津川沿には大河川の割には水田が少なく、従って山水が利用出来るような箇所に水田が開けている。又下流域では溜池に用水源のほとんどを頼っている。これは先にも述べた通り河床が低く直接取水出来ないためであろう。堰の築造も洪水時の耐久力に問題があり、又舟運の障害となることも一因としてあり、従って溜池に頼ったものと思われる。

図—4—4 主要水源と農地分布図

